

アメリカからのメッセージ

——ロアルド・ホフマンとフィリップ・ホエーランの詩——

田 中 泰 賢

ロアルド・ホフマン氏 (Roald Hoffmann, 1937-) はアメリカの大学で教育・研究をしている科学者で、1981年度のノーベル化学賞を福井謙一氏 (1918-1998) とともに受賞している。彼はまた文学者でもある。2016年11月3日、彼の自伝的戯曲『これはあなたのもの』(*Something That Belongs to You*) が名古屋工業大学で上演された。翻訳者は川島慶子氏 (名古屋工業大学教授) である。この戯曲はホフマン氏が幼いころ第2次世界大戦中に強制収容所に入れられ、その後、知人の屋根裏に隠れ住んだ辛い経験から生まれた作品である¹⁾。フィリップ・ホエーラン氏 (Philip Whalen, 1923-2002) はアメリカの詩人で、禅僧でもあった。2人の間に直接の関係は無かったけれど、2人とも第2次世界大戦を経験して、戦争の詩を書いている。彼らは日本文化にも関心を持っていることが彼らの詩集から窺える。そういった観点から彼らの詩の一端を紹介した。

キーワード：文楽 (ホフマン)、戦争 (ホフマン及びホエーラン)

ホフマン氏は詩人でもある。氏は数冊の詩集を出版している。その1冊に『メタミクト状態』(*The Metamict State*) という題名の詩集がある。この詩集の題名がいかにも科学者らしい性質を醸し出している。メタミクト状態とは『ブリタニカ国際大百科事典』によると「ウラン、トリウムなどの放射性元素を多く含む鉱物が放射能によってその結晶格子が破壊されて、X線に対しても可視光線に対してもガラスのような非晶質とみなされる状態がある。この状態をメタミクト化作用という」とのことである。この科学的な題名の詩集に「日本から三つの詩」と題して、二番目に「文楽」という詩が書かれている。

文楽

3人の黒い頭巾をかぶった人形を操る人たち、
1体の繊細で多色な操り人形。
1人は左手を動かす
1人は着物を動かす、隠れた足があるように見せかけながら
1人は残り全部を動かす
傍^{ゆか}らの床で
浄瑠璃を語る太夫は死を受け入れ、復讐をたくらむ、
戦の物語に声を張り上げ、唸る。
三味線弾きの左側に座る。

3人の黒い頭巾をかぶった人たち、一体の操り人形。
3人の動き、操り人形の自由。
 バリ島の影絵芝居とも違う、指人形でもなく、あるいは
 マリオネットでもない。
(人形の)操作が上手になされることによって(人形遣いの)姿が消える。

私の夢の避難所という劇場で
親愛なる淑女、あなたもまた操り人形。
あなたの父のうねった皺の顔と
 彼の苦悩をあなたは支えている。
夫の性の悩みに動じない態度にあなたは力づけられ、
師匠の激励によってあなたの覆面がふさわしいものになってくる。
あなたを最真にする人たちにはあなたは本当に信じられる人。
彼らは美、優雅さ、洒落を理解し
つかの間の情熱を込めた瞬間
魅了されてしまう
黒衣を着た人形遣いたちには目にも留めず²⁾。

1連目の「戦」という言葉、2連目の「自由」という言葉、3連目の「避難所」という言葉はホフマン氏自身が第2次世界大戦の時、迫害から逃れるために屋根裏部屋で誰にも見つから

ないようにひっそりと暮らした幼少の時の思いが重ね合わさっているように思われる。そして「自由」をどれほど待ち望んでいたのかという気持ちがこの「文楽」の詩に込められている。

森谷裕美子氏は文楽について次のように述べておられる。

文楽とは、人形浄瑠璃のことである。義太夫節（浄瑠璃）に合わせて人形を操る芝居である。江戸時代、大阪（近世の表記では大坂）で生まれた芸能であり、現在でも大阪や東京を中心に公演が行われている。

文楽は、義太夫節を語る太夫、三味線弾き、人形を操る人形遣いで主に成り立っている。舞台上に登場するのは、太夫、三味線弾き、人形遣いである。

その他、観客は直接目にはしないが、陰で笛や太鼓などを演奏する囃子、人形の首^{かしら}や手足を作る人、人形の髪を結び上げる床山^{とこやま}と言われる人、人形の衣装を調達する人がいる。また舞台上で使う小道具や、舞台装置などの大道具、照明、音響等の担当者も必要である。これらの人々の協力のもと、一つの舞台が作り上げられる³⁾。

森谷裕美子氏はわかりやすく文楽について説明しているので、私たちも文楽の概略について理解することが出来る。

上の詩の最初の行は「3人の黒い頭巾をかぶり、人形を操る人たち」と表現されている。「文楽の人形は、頭・顔にあたるかしらと右手を操作する「主遣い」、左手を操作する「左遣い」、足を動かす「足遣い」の3人で1体の人形を操る⁴⁾という。上から6行目は「傍らの床で」と表現されている。「床とは太夫と三味線が義太夫節を演奏するところ。客席に向かって張り出した、小さな廻り舞台ようになっており、クルリと廻ることで演奏者が交替する⁵⁾という。1連目の最終行「三味線弾きの左側に座る」とあるように、客席から見ると太夫は三味線弾きの左側に座って浄瑠璃を語る。しかし演奏者側から見れば逆になる。

2連目の最終行は「(人形の)操作が上手になされることによって(人形遣いの)姿が消える」と表現されている。「人形遣いの修業は、どうしても12、3才頃からでないと、旨くない。まず劇場内外の習慣や舞台の寸法を呑み込んで、小道具の出し入れから、浄瑠璃の文句を覚えて、次に足を持って主遣いにつれて匍匐廻るのだが、この小道具の出し入れ、後見の間が3年、足遣いが3年、左手が3年、合わせて一人前の人形遣いになるのがざっと10年ということになる。」⁶⁾文楽の人形を、あたかも人間であるかのように自由に操作できるようになるには長い期間の修業があって初めて一人前の人形遣いになることがわかる。

「人形遣いは黒い着付をきている。自分の顔さえ黒い頭巾で覆っているのが本当である。黒は無を意味して人形のみを活かすように出来ている。主遣いが高い下駄をはくのは人形を一定

の高さに差し上げているためと、足遣いの操作を自由にするためである。吉田玉五郎⁷⁾

「人形は眉が大きく上下させられるし、目は大きいし、^{ひやくにちかつら}百日鬘でも自由に大ゆすり出来るし手足は自由な形にきまれるのでさわやかな見得が出来る所以である⁸⁾」という。また浜村米蔵氏は「一体人間が自分自身で表現しないで、人形劇のような人形を操る演劇を造りだしたのには、凡そ二つの理由があると思う。一つはくどいようだが古代のカタシロとかヒトガタのような人形に寄せる信仰である。他の一つは簡単に動かしたり持ち運びができるからである⁹⁾」と語っている。上のホフマンの詩「文楽」の2連目の2行に「操り人形の自由」(the puppet's free)と表現されているのは人形によってより自由な動作や感情を表すことができることを仄めかしている。しかしそれだけでなくホフマン氏自身が幼いころ強制収容所という場所で不自由な時代を過ごしたと無縁ではない言葉がこの「自由」という響きではないだろうか。

昭和52年3月に「人間国宝」の指定を受けた初代玉男氏は、「文楽の人形は、物語を演じたり音楽に合わせて踊ったりするだけではない。人形遣い、太夫、三味線弾きが一緒になって劇的、美的経験を創造し、人間の感情の深い奥のほうを観客と一緒にうかがうものだ¹⁰⁾」と言う。人形遣いが黒衣を着ることによって人形を浮かび上がらせる。そして演じる側と観客が一体になって浄瑠璃の世界に入っていく。この詩行はそういう状況を意味していると思われる。

文楽から離れて、「浄瑠璃」という言葉の側面について紹介してみたい。それも筆者が住んでいる愛知県という限られた空間からの視点である。

高橋秀雄・蒲生郷昭氏は浄瑠璃について次のように述べている。「浄瑠璃の起源は明らかではないが、『平家物語』を語って演奏する「平曲」に続く新語り物音楽が、「浄瑠璃」という名で総称されている。おそらくは新しい時代にふさわしい語り物の音楽の曲目の中で、もっとも人気を呼んでもはやされたのが「十二段草子」とも呼ばれる『浄瑠璃姫物語』であったところから、浄瑠璃という名称が新語り物音楽の総称となったのであろう¹¹⁾」という。古典音曲の浄瑠璃は、本作の流行によってつけられた名前である。その内容は、「諸本によって内容は異なるが、もっとも古い形の山崎美成旧蔵写本によってみると、三河鳳来寺側で作られた薬師如来の申し子浄瑠璃姫の本地譚で、姫の恋の苦難と成仏(五輪碎^{ごりんくだき})が描かれ、薬師の利生を宣唱する御曹司蘇生(うしろ)の場(吹上)も重要な要素である。東海道筋に多く残る遊女と貴公子の悲恋という話の型の上のつた^{つた}矢作^{やはぎ}の遊女浄瑠璃と御曹司の悲恋の伝説が、その下敷きになっていると考えられる」(『日本古典文学大辞典』〈信多純一〉)という¹²⁾。

浄瑠璃姫物語には三河の鳳来寺が重要な要素であることがわかる。日本の薬師如来信仰は観音菩薩信仰とともに広く全国に浸透している。山田知子氏は「鳳来寺と三河・尾張の薬師信仰」と題して論じている。三河・尾張とは現在の愛知県である。山田氏は「三河・尾張地方には薬師をまつっている寺院やお堂が多い。ことに鳳来寺をはじめとする山岳寺院や臨海地の寺

院には、古代に創建されたと伝えられるものが多くみられる。略。薬師が山の神霊や海の神霊、あるいは死霊の鎮まりいます霊地霊場にまつられたということは、すなわち薬師がこれらの霊の象徴であったからである。したがって薬師は山神や海の神のもつ祟り易い性格と同時に、まつられることによって大きな恩寵をもたらすという二面的性格を有するものであり、こうした薬師を対象として悔過修行が行われ衆病消除や天下安全が祈願されてきたのである」¹³⁾と述べている。山田氏によると、愛知県は山側に位置する鳳来寺等のみならず海側の寺院にも薬師信仰が広がって今日にいたっている。薬師如来は慈悲深い仏であるけれどそれ以上に怠けやすい生活を励ましてくれる厳しい仏でもあった。

山田知子氏によると、「『浄瑠璃姫物語』は、『浄瑠璃御前物語』ともいわれ、室町時代の末頃より座頭などによって語られている「語り物」の一つで、庶民の間で最も愛好されたところから語り物のことを「浄瑠璃」と称するようになったと伝えられている。その内容は、三河（愛知県）の国司兼高と矢作の長者（遊女）夫婦が、鳳来寺峯の薬師に百日間参籠して祈願し授かった美しい娘「浄瑠璃」と、金売吉次に伴われて東国に下る途中矢作に宿した「牛若丸」との恋物語で、のちに十二段に分けられて『十二段草子』と呼ばれるようになった。これが大衆化して絵巻形式の読本もつくられ、さらに近松門左衛門作、竹本義太夫の『十二段』に発展したとみられている。」¹⁴⁾

浄瑠璃と薬師如来の関係であるが、「薬師如来の詳しい名号は、「みょうごう 東方とうほう浄瑠璃じょうるり浄土じょうど教主きょうしゅ薬師やくし如来」といい、東の方、じゅうごうがしゅ十恒河沙（ガンジス河の砂の数の十倍）の仏の国を過ぎた所に、浄瑠璃という世界があり、そこの教主である。略。薬師さまは修行中の菩薩の時、十二の願を立てている」¹⁵⁾という。薬師如来は別名、浄瑠璃のことであることがわかる。『浄瑠璃姫物語』は『十二段草子』とも呼ばれるが、この十二という数字は浄瑠璃薬師如来の大願の十二と偶然同じとは言い切れないと思う。作者は薬師瑠璃光如来の十二の大願を知っていた可能性が高い。

『浄瑠璃十二段草子』に「なむやくし十二しん、ねかはくは、身つからに、なんしにても、をなこにても、こたねを一人、さつけ給へ」¹⁶⁾とある。兼高夫妻が浄瑠璃薬師如来に男子であれ、女子であれ、子供を授けてくださるようお願いしている。上で述べられている「なむやくし十二しん」は南無薬師十二神将のことである。十二神将は薬師如来の眷属で、薬師如来の尊称を忘れない人々の護法神である。「なむやくし十二しん」とは浄瑠璃薬師如来と十二神将に帰依しますという意味になる。ちなみに飯塚幸謙老師は「薬師瑠璃光如来本願功德経」（大唐三蔵法師玄奘詔により訳し奉る）の十二の大願を簡潔にまとめておられるので引用させていただく。

「薬師瑠璃光如来本願功德経」(大唐三蔵法師玄奘詔により訳し奉る)

- 第一願 悟れる者の智徳を得させたい。
- 第二願 身体清浄、心情潔白にさせたい。
- 第三願 貧しさ故、欲しい欲しいと貪せぬ環境にさせたい。
- 第四願 偏見により、常に誤解する(邪道) ことのないようにさせたい。
- 第五願 遵法の心(法律のみならず、天地の理)を持たせたい。
- 第六願 物心身体貧困のため、人格不正常的のないよう、正したい。
- 第七願 病気になり、看護も、医療も、ベッドも、薬も欠けぬよう、治してやりたい。
- 第八願 煩惱に邪魔されず、まっすぐに修行が出来、男女の区別なく悟らせたい。
- 第九願 不正の仲間から立ち直らせたい。
- 第十願 受刑中の悪人も立ち直らせたい。
- 第十一願 身辺の逆境に遇って、むさぼりの悪に走ることをないようにさせたい。
- 第十二願 衣住に不足し、寒熱やむさぼりの悪に悩まされぬようにさせたい¹⁷⁾。

上の十二願全てが現代社会の課題であることがわかる。浄瑠璃が人々の娯楽であったろうし、今もそうである。しかし浄瑠璃が恋愛の問題を扱う物語であれ、戦争の問題を扱う物語であれ、或いは日常茶飯事の事件の問題を扱う物語等であれ、単に娯楽にとどまることなく上の十二願から見ても浄瑠璃の物語を人生の問題提起と受け止めていた人たちもいたのではないだろうか。

愛知県岡崎市の浄瑠璃姫の遺跡を拝登した。誓願寺(岡崎市矢作町馬場4)は名古屋鉄道(名鉄)の矢作橋駅で下車し、新国道を渡り、旧国道を右に折れると山門がある。山門の横に十王堂がある。境内に入ると右手に浄瑠璃姫のお墓と兼高長者のお墓等が安置されている。その前に設置されている掲示板には次のように記されている。

浄瑠璃姫の墓 中央宝篋印塔
兼高長者の墓 左端五輪塔
浄瑠璃姫縁起

浄瑠璃姫は年老いて子どものなかった矢作の里の長者兼高夫婦が日頃から信仰していた鳳来寺の薬師瑠璃光如来にお願いして授かったといわれる。そのため、浄瑠璃姫と名づけられ、たいそう美しく育った。1174年3月、牛若丸(源義経)は東北地方の藤原秀衡をたよって旅を続ける途中、矢作の里を訪れ、兼高長者の家に宿をとった。長者の家に11日ほど世話になっていたが、ある日ふと一室から静かに聞こえてきた美しい琴の音にひか

れ、持っていた笛で吹き合わせたことからいつしか二人の間に愛がめばえていた。しかし、義経は東北へ旅立たねばならず、形見として名笛「薄墨」^{うすずみ}を姫に授け、矢作の里を去った。姫は、笛を大切にしていたが、義経を想う心は日ごとに募るばかりで、ついに後を追いかけた。しかし、女の足ではとうてい追いつけず、添うに添われぬ恋に悲しみのあまり、管生川^{すごう}に身を投げて短い人生を終えた。時に、姫は17歳であったという。兼高長者はその遺体を当誓願寺に埋葬した。十王堂を建て、義経と浄瑠璃姫の木像を造り、「名笛・薄墨」と姫の鏡を安置し、冥福を祈った。浄瑠璃姫の墓や供養塔は岡崎公園の北口や成就院にもあり、人々にその悲しい恋をしをばせてくれる。

寄贈・文責 ポーイスカウト岡崎第五団

やはりこの掲示板にも夫婦が子どもを授かるように鳳来寺の薬師瑠璃光如来に願をかけていることが書かれている。東方浄瑠璃薬師如来の信仰が当時盛んであったことがうかがわれる。

名鉄の東岡崎駅を下車して乙川というきれいな河の近くのお寺、成就院を拝登した。お寺の中の墓地の一角に「浄瑠璃姫之墓」と書かれた黒石が石に嵌め込まれているお墓が安置されている。「浄瑠璃姫の墓」とある石版は、ここが姫の墓所ですという看板である。その後ろにある石塔の真ん中にある供養塔が姫のお墓として守られてきている。

中野政樹氏によると「釈迦が生涯を終えると、弟子たちはインドの風習の一つである火葬によって荼毘に附した。経説によると、荼毘のあと、舍利を八国に等分し、各国に塔をたてたという。このような仏舎利を釈迦の身舎利として尊崇するばかりでなく、また釈迦が在世中に所用した衣・鉢・杖なども舎利に準ずるとして尊崇した」¹⁸⁾という。また「仏塔は釈迦の遺骨などを納めた墳墓をいうが、その後、仏伝・説話に基づき、その故事にちなんだ場所に記念碑としても建てられた。」¹⁹⁾そして「死体遺棄の風習を持つわが国に、仏教が意味づけを与えることによって生まれたお墓は、故人の浄土における成仏を願って追善供養のために建立された。奈良時代に墓上に仏塔や層塔を建てることを行なわれ、平安時代に入ると多宝塔・板塔婆、鎌倉時代から五輪塔・宝篋印塔^{ほうきょういん}・板碑^{いたび}が建立されていく。」²⁰⁾お釈迦様の分骨、お釈迦様の故事にちなんだ物、場所にも塔が建てられたということが一般の人々のお墓にも及んでいる。従って供養塔は複数あってもおかしくない。種々の因縁でお墓や供養塔が複数まつられていることはその地域の人々の信仰心が篤いということを物語っている。九百年あまりたった今日、浄瑠璃が生きている。アメリカの大学で化学を教えておられるホフマン氏の詩「文楽」でそのことを教えられた。

次の詩もロアルド・ホフマンの作品「1943年6月」という詩の第1連である。

1943年6月

ほかの人たちは久しぶりに戻って来た
戦争が終わって、だからお父さん
あなたも死んではいないと思いたかった。
彼らが町の中であなたを連行した時、
多分あなたは抜け出て、走って逃げた。
彼らは誰かを撃った
ある日
あなたは帰って来たような気がする、
やせ衰えて、破れた服を着て、あなたが隠れた
沼地の話しをしてくれた。
ある日あなたは帰って来たような気がする、
ロシアから長い道のりを歩いて²¹⁾。

ここに取り上げたのは彼の詩集『記憶効果』(*Memory Effects*, 1999) からである。この詩は彼の詩集『触媒』(*Catalista*, 2002) にも取められている。彼はこの詩で戦争について書いている。第1連では語り手はお父さんの帰りを待ち望んでいる様子を描写している。しかし 結局お父さんは帰ってこないことが次の第2連ではっきりする。お母さんに何が起きたのか尋ねたのだ。第3連で語り手はお父さんの夢を見たことが綴られる。語り手は不思議な力が湧いてお父さんを助けようとした夢であった。最終連ではその夢もかなわなかったことが語られる。

“I closed the shutters”という表現がある。“shutters”は複数形になっている。雨戸を閉めた或いはシャッターを下ろすと解するが、まぶたを閉じたとも読める。お父さんが倒れるのを広場で人々に見させないように、お父さんがお母さんの名前を二度叫ぶのを人々に聞かせないように雨戸を閉め、まぶたを閉じた。浮かんでくる人々の顔から目をそむけた。

この「1943年6月」という詩は2つの詩集で一部分異なる。1999年に出版された詩集『記憶効果』では1連の上から6～7行目で“*They'd shot somebody else / One day*”²²⁾と表現されているが、2002年の詩集『触媒』(*Catalista*) では“*They'd shot another / in your place. One day*”²³⁾となっている。また『記憶効果』では1連の下から4行目で“*gaunt, in torn clothes, to tell stories*”²⁴⁾となっているが、『触媒』では“*gaunt, threadbare, to tell stories*”²⁵⁾となっている。

戦争の悲しさをホフマンは詩で謳っている。ホフマンが幼い時、彼の家族はナチスからの迫害から逃れるために屋根裏部屋でひっそりと暮らしていた。彼の詩集『孤立波』(*Soliton*,

2002)の中の詩「野原の光景」(Fields of Vision)で「屋根裏部屋から少年は／子供たちが遊ぶのをじっと見る」²⁶⁾と書かれている。じっと見るは原文では“watched”である。第2次世界大戦中、ナチスの迫害から身を守るために少年時代、屋根裏部屋で過ごしたホフマンは外で遊んでいる少年たちのように自分も思う存分遊びたい気持ちがここに表れている。彼の戯曲『これはあなたのもの』(Something That Belongs to You, 2015)でも「屋根裏部屋で、私は子供たちが遊ぶのをじっと見た」²⁷⁾と書かれている。子供心にどんなにか外で思いっきり遊びたかったのか。しかしそれが戦争によって断ち切られている。口惜しかったことであろう。

この『これはあなたのもの』で「屋根裏部屋ではあまり明るくなかったので、窓の近くで本を読んだ。昼間だけ」²⁸⁾とある。読書をするのに窓からの光だけが頼りとなった様子が描かれている。彼の詩集『割れ目と杖』(Gaps and Verges)の詩「伸縮する印」(Stretch Marks)²⁹⁾に“Dachau”という言葉がある。ダッハウ(Dachau)はナチスが南ドイツのミュンヘン近くに作ったユダヤ人のための強制収容所であった。1945年4月29日のダッハウ強制収容所解放後にアメリカ陸軍によって収容所職員たち及びドイツ人戦争捕虜たちが虐殺された。同詩集に「二人の父」(Two fathers)という詩がある。ホフマンの父は戦争のもと、「強制収容所から集団脱走を主導したかどで殺された。」³⁰⁾「彼の母親が再婚した相手もまた戦争で妻を亡くしていた。ホフマンが8歳の時であった。」³¹⁾

アメリカの詩人であったフィリップ・ホエーラン(Philip Whalen)も「ダイアン・ディ・ブリマに捧げる戦争の詩」と題する戦争についての詩を書いている。その中で次のような一節がある。

私が読みたかったのは R. H. ブライスによって翻訳された大切なことだけ、
一万八千ポンドのナパーム弾とヘリコプター、
私は何故戦争に負け続けるのか。戦争をうっかり信用しているのか³²⁾。

この詩が書かれた1966年はベトナム戦争が激化している。上の詩の2行目にあるように大量のナパーム弾によって無差別攻撃が行なわれ、多くのベトナムの市民が犠牲になっている。1963年6月にはベトナムの仏教僧、ティック・クアン・デック師は植民地政策を押し進めるフランスとそれを後押しするアメリカを背後にした南ベトナム政府、ゴ・ジン・ジェム政権の仏教徒への抑圧に抗議して、焼身自殺をしている。松岡完氏は次のように述べている。

1963年5月8日。釈迦生誕の記念日に、ベトナム仏教の中心地である古都フエで、仏教徒が仏教旗を掲げ、宗教弾圧に抗議するデモを行った。政府軍の発砲で少なくとも9人が

死亡、14人が負傷する。略。仏教徒は国民のほぼ8～9割を占めていた。僧侶は民衆の利益の代弁者、ジェムにいわせれば反政府分子の先鋒だった。共産主義体制の北ベトナムは、国民の団結を優先する必要から宗教弾圧を自制するだけの賢明さ、ないし巧妙さを備えていた。しかしジェムは、国教扱いのカトリック教会には旗の掲揚を認めても、仏教寺院には許そうとしなかった。政府は発砲事件をベトコンの仕業だとうそぶいた。ティック・クアン・デュックら7人の僧侶があいついで抗議の焼身自殺を行い、世界に衝撃を与えた³³⁾。

2012年8月30日の *The Japan Times* に「サイゴンの僧侶焼身自殺報告者ブラウン氏亡くなる」(“Saigon burning monk reporter Brown dies”)³⁴⁾ という記事が掲載されている。当時 AP 通信記者であったマルコム・ブラウン氏 (Malcolm Browne, 1931-2012) は1963年6月にこの仏教僧、ティック・クアン・デュック師の焼身自殺の写真を世界に発信して世界の人々にベトナム戦争で何が行なわれているかという問題提起をしたのである。同紙はこの記事の中で「マルコム・ブラウン氏が1998年のインタビューで当時を思い起こし、この焼身自殺の直後、大きなデモが仏教僧だけにとどまることなく、サイゴンの多くの一般市民の支持を得るようになった」³⁵⁾ と伝えている。「1958年から1971年まで農業指導員などとして南ベトナムに住み、ベトナムの詩の英訳まで手掛けたあるアメリカ人は帰国直前にベトナムの知人に向かって、アメリカの友人に何か伝えたいことはないかと質問したところ、そのベトナム人はアメリカ人ご愛用の侮蔑的スラングの類を並べあげ、われわれは *slants* (東洋人) でも、*slopes* (東洋人) でも、*gooks* (東洋人) でも、*dinks* (東洋人) でもなく、「人間なのだ！」と言いつつ放ったという。」³⁶⁾ このエピソードは当時のベトナムの人たちが如何にアメリカ人を嫌っていたかを物語っているし、戦争によってお互いが強い不信感に陥るかを私たちは知ることが出来る。

アメリカ合衆国首都ワシントン D.C. にベトナム戦争戦没者慰霊碑が1982年に建立されている。「(これは) ベトナム帰還兵の組織の尽力によるものであった。略。壁面には、ベトナム戦争で命を落とした5万8千132人の男女の名前が、死亡した日時順に刻み込まれ、その最初と最後には碑文が彫られている。」³⁷⁾ この戦没者慰霊碑からベトナム戦争によって多くのアメリカ人も尊い命を落としていることがわかる。「帰還兵たちは、しばしば夜、群衆の足が遠のいた時間帯になって、記念碑のまわりに現れるのである。ここは、帰還兵たちがかれらの亡くなった友人たちに話しかけることのできる場所、瞑想の場所、彼らのアイデンティティに特別な意味を与える場所である。二人の帰還兵は、この場所でピストル自殺をしている。」³⁸⁾

三百万人余りの亡くなったベトナムの人々、六万人近くの亡くなったアメリカ人、枯れ葉剤によって今なお苦しむベトナムの人々、戦争によって心身が傷つけられたアメリカの人々を見

ると戦争の悲惨さを痛感する。それをホエーランは上の短い詩で表現しようとしている。ホエーランは主語が複数形の「私たちは何故戦争に負け続けるのか」という文章にせず、「私は何故戦争に負け続けるのか」というように主語を「私」という単数形にしているのは注目するところである。単数形にすることによって私という存在が戦争という狂気にかけてしまうもどかしさ、苦しさ、無力感を表している。

今、引用したこの詩の一節の1行目に R. H. ブライスという名前がある。R. H. ブライス (1898-1964) の研究で有名な吉村侑久代氏によると、「ブライスは66歳の時、1964 (昭和39) 年10月28日、脳腫瘍で逝去。11月1日、学習院旧図書館で葬儀。鎌倉 東慶寺山内、鈴木大拙・夫人ベアトリス女史の近くに埋葬。法名、不来子古道照心居士³⁹⁾とある。吉村侑久代氏は同書で次のように述べておられる。

第四高等学校の英語教師として金沢にいたブライスは、1941年12月8日、開戦と同時に石川県警察に保護され、広坂 (現在の中警察署) の建物内に抑留される。3月、係官に付き添われて神戸に赴き、「交戦国民間人抑留所」となった神戸市北野町のイースタン・ロッジ・ホテルに収容された。富子夫人は1ヶ月前に生まれたばかりの長女・春海とともに神戸に移り、元町に家を借りた。抑留所の週一回の面会には、ブライスの好物の干瓢の海苔巻きずしを作り、必要な書物や文房具をせっせと運んだ。何年続くか判らぬ戦争である。この状況をよく堪え忍び、ブライスに著述を続けさせた富子夫人の内助の功は計りしれぬほど大きい。ブライスはこの抑留所で彼の代表的な著書である『俳句』4巻の原稿を書き上げている。さらにロバート・エトケンによると、*Senryu, Buddhist Sermons on Christian* もこの時期であったようだ⁴⁰⁾。

戦争によって収容所生活を余儀なくさせられてしまう。そして家族が離れ離れになって暮らしていく状態は精神的にも辛いものであったろう。それにも拘わらず俳句、川柳の執筆を続けていったという。「後にブライスを師と仰ぐようになるロバート・エトケンがグアム島から連行されて、日本での抑留生活を経験していた。神戸の収容所で、エトケンは出版されたばかりの『禅と英文学』に出会い、むさぼるように読んだという。」⁴¹⁾捕虜となってグアム島から日本の収容所で過ごしたロバート・エトケンは戦争中に北星堂から出版されたブライスの著書『禅と英文学』(1942年12月)を読み、その後本格的に禅を修行していった。「神戸の抑留所で、人々を虫けら同然に扱う監視人を見て、ブライスは「ここにいる監視人のような人間によるアメリカ領土の占領を君は想像できるかね」とエトケンに言ったという。」⁴²⁾ホフマンもブライスも収容所の生活を送っている。ホエーランは2行の短い「戦争」という詩も書いている⁴³⁾。こ

これはホエーラン自身が第2次世界大戦に兵隊として戦争に参加した記憶の上に、ベトナム戦争について書いた詩である。

上の詩の1行目「私が読みたかったのは R. H. ブライスによって翻訳された大切なことだけ」からホエーランもまた R. H. ブライスの著書を愛読していたことがわかる。「ブライスは、自分の「内なる運命」として、ワーズワースの持つアニミズムを自己の文学的アイデンティティとし、菜食主義に至り、俳句の道に入る。そして、大拙の禅書を通して禅に出会い、川柳に行きついた⁴⁴⁾と吉村氏は述べる。そして吉村氏が直接対談したブライスの長女である春海ブライス氏は「父 (R. H. ブライス) は川柳が本当に好きだった。川柳のことを健康を保つための栄養と言っていた⁴⁵⁾と語っている。この対談は R. H. ブライスのことを知る貴重な資料である。ホエーランは愛読した R. H. ブライスの著書からブライスの温かい人柄を学び、ベトナム戦争で苦しんだ様子を簡潔に表したのが上の詩である。

ホエーランはこの詩をダイアン・ディ・プリマ (Diane di Prima, 1934-) に捧げている。彼女はビート世代の詩人である。彼女は「アレン・ギンズバーグの詩集『吠える』を愛読し、アレン・ギンズバーグは彼女たちに新境地を開かせてくれた⁴⁶⁾と語っている。彼女の家族はイタリア系アメリカ人でニューヨーク市ブルックリンに住んでいて、彼女はそこで生まれた。「ダイアン・ディ・プリマの11歳の誕生日、1945年8月6日、家族は父が仕事から帰るのを待っていた。父は遅くまで仕事をしていた。父は手に新聞を握りしめて帰って来た。その新聞の見出しは大きくて、半頁より大きかった。父の顔は陰うつで、憂うつな様子であった。家に入っても帽子をかぶったままであった。部屋はシーンとなった。誕生ケーキが食卓の上にあったが、ろうそくは火が点されていなかった。父は新聞をコーヒー・テーブルに投げつけて「我々は負けた」と語った。突然大変な事態になった。「どうして私たちは負けたの」「何が起きたの」「戦争は終わったの」皆がいっせいに口を開いた。それは爆弾であった。私たちの誰もそれが何であるか知らなかった。それは広島。広島が何処にあるか私たちの誰も知らなかった。父は言った「私たちが今何をなそうとも、私たちは負けた⁴⁷⁾。彼女は後にカリフォルニアに移住してアラン・マルローと結婚する。1962年11月30日、仏教寺院、ソーコージ (桑港寺) で鈴木俊隆老師の導師のもとで結婚式が行なわれた。鈴木俊隆老師は二人の結婚式の導師をする前に2人に会って、導師を務めることは2人に対して、2人が精神的に幸せであることの責任があることを語っている。数日後、鈴木俊隆老師は弟子のリチャード・ベイカーに導師を引き受ける旨を伝えている⁴⁸⁾。ホエーランはリチャード・ベイカー師の弟子になっている。

ホエーランは「接心 エピグラム」(The Sesshin Epigram) と題する2行の短い詩を書いている。

撮心 エピグラム

目が予言できない事を
手は予見する

1973年8月8-9日⁴⁹⁾

撮心せっしんは撮心とも書く。撮はおさめること、整うこと、安んじ、静謐の姿、かたちを持つことである。だから撮心とは心を散ぜしめざることという。禅寺では一定期間、他の行事をやめてひたすら坐禅修行することを撮心という。または撮心と表現する。ホエーランは原文も“Sesshin”と書いている。ホエーラン自身が禅僧であったので撮心の意味を理解していたけれど、一般の読者には意味が分りかねるであろう。にもかかわらず“Sesshin”と書くところに風刺的な態度が見える。エピグラムとは短い風刺詩、寸鉄語、警句といった意味がある。「目が予言できないことを」は原文では“what the eye / Cannot foretell”と表現しており、「手は予見する」は原文では“The hand foresees”と表現している。主語“the eye”（目）に対して動詞“foretell”（予言する）が使われ、主語“the hand”（手）に対して動詞“foresee”（予見する）が使われているのは面白く、ユーモアを感じる。

ホエーランはまた「エピグラム、自身を」(Epigram, upon Himself) と題する2行の短い詩を書いている。

エピグラム、自身を

人々は私の全ての短所を許してくれる
しかし私が太っていることをひどく嫌う⁵⁰⁾。

詩人のホエーランは太っているために嫌われた。『デブの帝国—いかにしてアメリカは肥満大国となったか』の著者、グレッグ・クライツァー氏も肥満のため「デブ」という暴言を受けた事を著書の中で語っている。氏は肥満を擁護する研究者の論や、それとは異なる研究者の論、様々な角度からの論を取り上げて、詳細に検討している。そしてクライツァー氏は次のように述べている。

5年ほど前、アメリカで最も急速な発展を遂げている町、テキサス州サンアントニオの学校は、厄介な問題に直面していた。健康に関する地元の非営利団体の新たな調査によっ

て、学校関係者が実のある改革をしないかぎり、この地区の50の小学校に在籍する児童のうち3千人が、じきに生活習慣による2型糖尿病になるとわかったのだ。主たる原因は太りすぎ「デブ」であるという⁵¹⁾。

クライッター氏は「この学校区が従来のアメリカの慢性的な病気に対する態度から脱して積極的に問題を解決しようとした」⁵²⁾と述べている。氏は太りすぎ「肥満」と貧困と運動不足を結びつけている。そしてそれは生活習慣病につながりやすいと語っている。ディードリ・バレット氏は「アメリカは世界でもっとも「肥満」が蔓延している国であり、他の国々もその後を追いはじめている」⁵³⁾と警鐘を鳴らしている。そして氏は「人間が看板に気づいて動物に餌をやらなくなれば、動物園の動物たちはマシュマロやポテトチップスのことを考えることはなくなり、喜んで草を食べるようになるだろう。私たち人間だってそうなのだ」⁵⁴⁾と結んでいる。現代の医学研究は肥満の諸原因、肥満と糖尿病の関係、肥満を防ぐ方法の研究等がますます進み、私たちに朗報をもたらすであろう。肥満が個人だけの責任とは言い切れないことになるかもしれない。詩人のホエーランは自らが太っていることを短い詩に書いて問題提起をしている。ホフマンもまた戦争の詩を書いて問題提起をしている。そういった意味で二人の書いた詩も又貴重な作品だと思う。

注

- 1) 田中泰賢『Buddha 英語 文化 田中泰賢選集 全5巻』(あるむ、2017)、第2巻、「序文」、9頁。
- 2) Roald Hoffmann, *The Metamict State*, Cover illustration by A.R. Ammons (University of Central Florida Press, 1987), p. 22. 田中泰賢訳。
- 3) 森谷裕美子氏から筆者あての書簡(2018年11月23日付け)。
- 4) 『文楽入門—鑑賞のしおり—』国立文楽劇場営業課編集(独立行政法人日本芸術文化振興会、2018)、6頁。
- 5) 同上、8頁。
- 6) 浜村米蔵・木下順二編『歌舞伎・能・文楽 その新しい見方』(平凡社、1954)、205頁。
- 7) 『文楽』編集解説:大西重孝・吉永季雄、写真:三村幸一、装釘:澤野井信夫(文楽座出版部、1956)、24頁。
- 8) 同上、30頁。
- 9) 浜村米蔵・木下順二編『歌舞伎・能・文楽 その新しい見方』、208頁。
- 10) バーバラC.足立『文楽の人びと』ジェイソンG.チョウイ訳(講談社インターナショナル、1978)、33頁。
- 11) 岸辺成雄・平野健次・増田正造・高橋秀雄・服部幸雄・蒲生郷昭監修『音と映像による日本古典芸能大系 総論編』解説書編集・制作、平凡社(日本ビクター、1992)、76頁。
- 12) 『釈迦・薬師信仰便覧』(斎々坊、2000)、189頁。

- 13) 山田知子「鳳来寺と三河・尾張の薬師信仰」『民衆宗教史叢書 第十二巻 薬師信仰』五来重編（雄山閣出版、1986）、117-118頁。
- 14) 同上、87-88頁。
- 15) 飯塚幸謙『信ずる心 薬師如来 病苦離脱へ』（集英社、1989）、18-19頁。
- 16) 横山重・松本隆信編『室町時代物語大成 第七（全十六巻）』（角川書店、1987）、378頁。
- 17) 飯塚幸謙『薬師如来』、67頁。
- 18) 中野政樹「舍利とその容器」『新版仏教考古学講座 第三巻 塔・塔婆』監修 石田茂作（雄山閣、1976）、245頁。
- 19) 監修 古田紹欽／金岡秀友／鎌田茂雄／藤井正雄『佛教大事典』（小学館、1988）、864頁。
- 20) 同上、786頁。
- 21) Roald Hoffmann, *Memory Effects* (Calhoun Press, 1999), p. 12. 田中泰賢訳。
- 22) *Memory Effects*, p. 12.
- 23) Roald Hoffmann, *Catalista* (Huerga & Fierro editors, 2002), p. 50.
- 24) *Memory Effects*, p. 12.
- 25) *Catalista*, p. 50.
- 26) Roald Hoffmann, *Soliton* (Truman State University Press, 2002), p. 79.
- 27) Roald Hoffmann, *Something That Belongs To You* (Dos Madres Press, 2015), p. 12. & p. 55.
- 28) *Something That Belongs To You*, p. 16.
- 29) Roald Hoffmann, *Gaps and Verges* (University of Central Florida Press, 1990), pp. 31-32.
- 30) *Gaps and Verges*, p. 22.
- 31) 同上引用文中。
- 32) Philip Whalen, *The Collected Poems of Philip Whalen* (Wesleyan University Press, 2007), p. 500. 田中泰賢訳。
- 33) 松岡完『ベトナム戦争 誤算と誤解の戦場』（中央公論社、2001）、171-172頁。
- 34) *The Japan Times*, Thursday, August 30, 2012. New York AP.
- 35) 同上引用文中。
- 36) 吉沢南「ベトナム戦争」『岩波講座日本通史 第20巻 現代1』編集委員 朝尾直弘 網野善彦 石井進 鹿野政直 早川庄八 安丸良夫（岩波書店、1995）、352頁。
- 37) マリタ・スターケン (Marita Sturken)『アメリカという記憶 ベトナム戦争、エイズ、記念碑的表象』(*Tangled Memories: The Vietnam War, the AIDS Epidemic, and the Politics of Remembering*) 訳者 岩崎稔・杉山茂・千田有紀・高橋明史・平山陽洋（未来社、2004）、88頁。
- 38) 同上、117頁。
- 39) 吉村侑久代『イギリス生まれの日本文学研究者 R. H. ブライス (Reginald Horace Blyth) 研究』（林檎屋文庫、2017）、182頁。
- 40) 同上、65頁。
- 41) 吉村侑久代『R. H. ブライスの生涯 禅と俳句を愛して』（同朋舎出版、1996）、103頁。
- 42) 吉村侑久代『イギリス生まれの日本文学研究者 R. H. ブライス (Reginald Horace Blyth) 研究』61頁。
- 43) 田中泰賢「既成価値を問うアメリカの詩人たち—ホエーラン、スナイダー、ギンズバーガー」『愛知学院大学教養部紀要』第65巻第3号（2018）：15-33参照。
- 44) 吉村侑久代『イギリス生まれの日本文学研究者 R. H. ブライス (Reginald Horace Blyth) 研究』118頁。

- 45) 同上、127頁。
- 46) Diane di Prima, *Memoirs of A beatnik* (Penguin Books, 1988), pp. 176–177.
- 47) Diane di Prima, *Recollections of My Life as a Woman* (Penguin Books, 2001), p. 50.
- 48) 同上、p. 320.
- 49) Philip Whalen, *The Collected Poems of Philip Whalen*, p. 695. 田中泰賢訳。
- 50) 同上、p. 704. 田中泰賢訳。
- 51) グレッグ・クライツァー (Greg Critser) 『デブの帝国 Fat Land いかにしてアメリカは肥満大国となったのか』 (*How Americans Became the Fattest People in the World*) 竹迫仁子^{たけさきひとこ}訳 (バジリコ、2003)、224–225頁。
- 52) 同上、225–226頁。
- 53) ディードリ・バレット (Deirdre Barrett) 『加速する肥満—なぜ太ってはダメなのか』 (*Waistland*) 小野木明恵訳 (NTT 出版、2010)、216頁。
- 54) 同上、250頁。